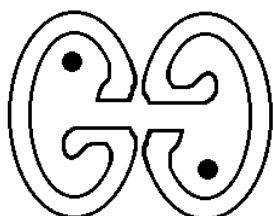


日本双生児研究学会ニュースレター



《第 75 号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2024 年 12 月発行

目 次

日本双生児研究学会第 39 回学術講演会

プログラムのご案内 2025 年 2 月 1 日(土) 開催.....	2
第 41 回日本双生児研究学会夏の研修会のご報告.....	5
論文・書籍・研究紹介.....	6
総会・理事会報告.....	12
学会事務局よりお知らせ.....	16
編集後記.....	16

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号 (00910-2-253840)、加入者名 (日本双生児研究学会) をご記入の上、年会費をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX 番号・E-mail 等をお書き添え下さい。年会費については最終ページの事務局からのお知らせをご覧ください。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-7 大阪大学大学院医学系研究科
附属ツインリサーチセンター内 日本双生児研究学会事務局
学会ホームページアドレス <https://jsts.jp.net/>



日本双生児研究学会 第39回学術講演会のご案内

日程 2025年2月1日（土）（対面開催のみ） 9時30分受付開始

会場 大阪大学大学院医学系研究科附属最先端医療イノベーションセンター
一階 マルチメディアホール

大会長 渡邊幹夫（大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター）

参加費 会員および一般 2000円 多胎児家庭 500円 学生無料（要学生証）

会場アクセス 大阪モノレール「阪大病院前」下車 徒歩約8分程度（下図参照）

<http://www.comit.med.osaka-u.ac.jp/jp/access.html>



（注意）病院新築工事中のため、モノレール駅からは

上図の⇒にそって病棟南側から回り込んでおいでください

発表者のみなさんへ

- 一般演題は質疑応答込みで12分です。8分程度で発表を終え、質疑時間をとれるようにしてください。交代時間を入れて1演題13分の持ち時間です。
- Windows上のPowerPointの準備をしていますので、USBメモリ等でセッション開始前にデータをお持ちください。持ち込みPCご希望の場合は事前にご連絡ください。

昼食について

上図中の➡で示している「本部前福利会館」（徒歩5分程度）、あるいは病院内に食堂およびコンビニがあります。

日本双生児研究学会第39回学術講演会 プログラム

2025年2月1日（土）

大阪大学最先端イノベーションセンター マルチメディアホール

10:00 開会のあいさつ

日本双生児研究学会 理事長 横山美江(大阪公立大学)

日本双生児研究学会第39回学術講演会 大会長 渡邊幹夫(大阪大学)

10:05-11:00 一般演題 1

座長 横山美江(大阪公立大学)

O1 一卵性双生児を対象としたメンタルヘルスに影響を及ぼすゲノム・エピゲノム因子の同定

稻山綾乃¹、荒川裕也^{1,2}、亀井莉歩¹、鴻野天音¹、米田真菜¹、大阪ツインリサーチグループ²、渡邊幹夫^{1,2}
(¹大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻生体病態情報科学講座、²大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター)

O2 アレルギー疾患に影響するエピゲノム因子の一卵性双生児を対象とした解析

亀井 莉歩¹、北村 夏樹¹、川上 莉歩¹、稻山 綾乃¹、鴻野 天音¹、米田 真菜¹、荒川 裕也^{1,2}、大阪ツインリサーチグループ²、渡邊 幹夫^{1,2} (¹大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻生体病態情報科学講座、²大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター)

O3 一卵性双生児を対象とした月経痛の程度に影響を及ぼす環境因子の解析

鴻野天音¹、稻山綾乃¹、亀井莉歩¹、米田真菜¹、北村夏樹¹、川上莉歩¹、荒川裕也^{1,2}、大阪ツインリサーチグループ²、渡邊幹夫^{1,2} (¹大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻生体病態情報科学講座、²大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター)

O4 一卵性双生児を対象とした認知機能に影響を及ぼすエピゲノム因子の解明

米田真菜¹、稻山綾乃¹、亀井莉歩¹、鴻野天音¹、荒川裕也^{1,2}、大阪ツインリサーチグループ²、渡邊幹夫^{1,2}
(¹大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻生体病態情報科学講座、²大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター)

11:00-11:55 一般演題 2

座長 松葉敬文(岐阜聖徳学園大学)

O5 出生体重と乳幼児期から成人期における身長との関連

横山美江 with CODATwins Project

O6 双生児のライフヒストリー研究 2—異なるライフコースをたどった事例の比較

安藤寿康 (慶應義塾大学名誉教授)

O7 「双生児間の同時イベント発生現象」を通しての一考察

松田葉子 (西大和学園大和大学保健医療学部看護学科)

O8 小児期における三つ子のチック症状と吃音症状

齊藤 彩¹、田中 麻未²、菅原 ますみ³、大木 秀一、横山 美江⁴ (¹お茶の水女子大学、²帝京大学、³白百合女子大学、⁴大阪公立大学)

11:55-12:25 ショートレクチャー

座長 乾富士男(天理大学)

「双生児法に基づく人間行動遺伝学の基礎」

高橋雄介 (京都大学 大学院教育学研究科)

12:25-13:25 昼食・理事会

13:30-13:50 総会

13:50-14:50 教育講演

座長 渡邊幹夫(大阪大学)

「遺伝統計学的アプローチによる遺伝的背景の理解」

山本賢一 (大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻成育小児科学研究室)

15:00-15:40 一般演題3

座長 安藤寿康(慶應義塾大学名誉教授)

O9 生殖補助医療後に双胎妊娠した女性の母性を育む WEB 版教材の開発

藤井美穂子¹、相澤恵子²、米倉佑貴² (¹帝京科学大学医療科学部看護学科、²聖路加国際大学大学院看護学研究科)

O10 双生児が学校環境に与える影響について—紐帶としての双生児—

日比 健人¹、根子 雄一朗¹、西田 寛子¹、関塚 洋子¹、南澤 武蔵¹、対比地 覚² (¹東京大学教育学部附属中等教育学校双生児研究委員会、²東京大学教育学部附属中等教育学校)

O11 新聞報道における双生児に対する意識の歴史的変容

南澤武蔵¹ (¹東京大学教育学部附属中等教育学校)

15:40-16:40 シンポジウム 「多胎家庭支援の新たな展開 ~関西地域を中心に~」

座長：志村恵（公立小松大学・日本多胎支援協会）

S1 オンライン支援と地域での支援をつなげる：多胎家庭支援におけるNPO 法人つなげるの取組み

中原美智子 (NPO 法人つなげる・株式会社ふたごじてんしや・日本多胎支援協会)

S2 産前産後サポート事業での多胎支援事業について —神戸市の取り組みの紹介—

天羽千恵子 (ひょうご多胎ネット・日本多胎支援協会)

S3 日本多胎支援協会全国多胎支援リーダーボトムアップ事業プロジェクトチーム

糸井川誠子 (NPO 法人ぎふ多胎ネット・日本多胎支援協会)

16:40 次期大会長あいさつ

日本双生児研究学会第40回学術講演会 大会長 藤澤啓子(慶應義塾大学)

懇親会は予定しておりません

< 第42回双生児研究会(2024年7月27日(土)開催)報告 >

岐阜聖徳学園大学経済情報学部 松葉 敬文

2024年7月27日(土)に「第42回双生児研究会」(2024年度「夏の研究会」)を開催いたしました。

■ 開催概要

日時：2024年7月27日(土) 13:30～15:00

形式：zoom オンライン開催

演題：『双子研究の意味する実存的アポリアと社会科学』

講師：蔵 研也 先生(自由主義研究所 主任研究員)

参加者数：8名(うち演者1名)

講師の蔵研也先生は、東京大学法学部を卒業後、数学および経済学の修士号を取得され、さらにUniversity of California, San Diego (UCSD)で経済学の学位を修められたご経歴をお持ちです。経済学、法哲学、政治学、心理学、行動遺伝学、神経科学といった多岐にわたる分野で研鑽を積まれ、現在は日本のリバタリアニズムを代表する研究者としてご活躍されています。

今回の講演では、双生児研究によって発展してきた行動遺伝学の主要な結論について、ブシャール氏、プローミン氏、安藤寿康先生らの研究成果の簡潔なまとめから、これらの知見が現代社会哲学(とりわけジョン・ロールズによる平等と正義の理論と、ロバート・ノージックの反論)とどのような整合性・不整合性を持つかについて丁寧に解説していただきました。さらに、行動遺伝学の知見とこれらの見解の対立が単なる科学の問題ではなく、価値観に基づく解決不可能なアポリアであることをご指摘いただきました。本講演は、行動遺伝学と社会哲学の交点を探る重要な機会となり、多くの示唆を与える内容となりました。幅広い分野にまたがる知見をわかりやすく纏められた蔵先生に深く感謝申し上げます。

また、前回の第41回研究会では非学会員の方から参加に関するご要望を多数いただきました。このことを踏まえて理事会で議論の上、今次研究会から有料で非学会員の方にもご参加いただけることとなりました。学会員の皆さんには引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に、研究会にお集まりいただいた皆さん、そして開催にあたり多大なご助力を賜りました皆さんに心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

論文・書籍・研究紹介

双生児研究法を用いた肌・身体・心の関係性解析にむけて

株式会社資生堂みらい開発研究所

原 祐輔

肌を健康的に保つにはどうしたら良いのか。この基本的かつ重要な課題に取り組む手段の1つとして双生児研究法が効果的であると考え、体系的ふたご研究基盤を有する大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンターと共同研究を行っている。本稿では、その取り組み内容の一端について、背景を含めて紹介させていただく。

本研究の主たるターゲットである「肌」は、外部環境と生体内部の境界に位置しており、外部環境から生体を守るバリア機能や体温調節機能、触覚などの感覚機能などの重要な役割を担っている。これらの機能を正常に働かせている肌の状態は、紫外線などの外部刺激の影響だけではなく、身体状態の影響も受けて変化することが知られている^{1,2)}。さらに、心理状態の影響も受けることも知られており、精神的なストレスが肌状態の悪化として顕在化することがある³⁾。肌を健康的に保つには、肌・身体・心の関係性を理解して対処する必要があるが⁴⁾、それらの因子はお互いに複雑に交絡するとともに、遺伝的な影響も受けるため⁵⁾、未だ解明されていないことが多い。これらの課題を解き明かすにあたり、双生児研究法は遺伝的・環境的要因の影響を比較できる有用な方法であり、過去の検討ではシワやシミの遺伝率などが導出されている⁶⁾。しかし、肌状態と身体・心の関係性にまで踏み込んだ検討は少ない。

本研究では、双生児研究法による肌・身体・心の関係性の解析を行っており、近年開発された肌内部の測定技術も取り入れている⁷⁾。その結果の一例として、一卵性双生児を対象にした検討により、肌内部のコラーゲン量と毛細血管の関係性などを見出している。今後のさらなる検討により、肌を健康的に保つために必要な要素が明確化されていくとともに、肌をケアする方法として、化粧品だけではなく、食品、運動、睡眠など一人ひとりに合った提案がなされることが期待される。

- 1) Kligman LH. *Dermatol Clin.* 1986;4(3):517-528.
- 2) Makrantonaki E, Zouboulis CC. *Exp Gerontol.* 2007;42(9):879-886.
- 3) Chen Y, Lyga J. *Inflamm Allergy Drug Targets.* 2014;13(3):177-190.
- 4) Okamura C, et al. *IFSCC Congress.* 2023; PRB-128.
- 5) Amano S, et al. *Skin Res Technol.* 2023;29(1):e13231.
- 6) Gunn DA, et al. *PLoS One.* 2009;4(12):e8021.
- 7) Hoshino T, et al. *Quant Imaging Med Surg.* 2024;14(9):6238-6249.

論文・書籍・研究紹介

志村恵 1)2)、松葉敬文 2)3)、松本彩月 2)4) 「多胎家庭への支援の必要性とその考え方」

『周産期医学』52巻9号（2022年9月）、1193-1197頁。

1) 金沢大学、現公立小松大学、2) 日本多胎支援協会、3) 岐阜聖徳学園大学、4) 金城学院大学、現四日市大学

1. はじめに

多胎育児の大変さは、虐待死のリスクが単胎比で2.5~4倍と言われる程であるが、その根本は同じ月齢・年齢の児を同時に育てる「同時育児」である。一方、産院等からの届出により、妊娠期からの把握・対応が容易である点もその特徴である。「母子健康手帳」の交付時の社会資源を含めた情報提供がそれを生かした支援例である。多胎家庭の育児は何らかの荷重がさらに生じると大きなリスクが生じる。しかし、適切な時期からの適切な介入によってリスクを軽減することは可能である。

2. 多胎の妊娠・出産・育児の困難感、リスクおよび問題点

多胎家庭の妊娠・出産・育児の困難さは、医学的リスクに由来するものと、同時育児という多胎の特徴に由来するものに大別され、またそれぞれが妊娠期、出産期、育児期、それ以降、と時期ごとにまとめられる。

妊娠期における問題点は、妊娠高血圧症候群やTTTSとその類縁疾患等の医学的リスクや疾患、切迫流産、早期からの長期入院、さらには出生前検査・遺伝学的検査にまつわる問題、不妊治療に関する問題（たとえば妊娠それ自体が目的化）等多岐にわたる。また、産後における問題点は、産後うつの高い割合、児の低体重、障がい、一児死亡、一児入院、母子の長期入院、父母の愛着形成不全、成長や発達の遅れ等がある。育児期、特に乳児期における問題点は、これらの医生物学的な問題に加え、同時育児によるものが多く、授乳や泣き、入浴、おむつ替え等が連続して、育児者はほとんど睡眠が取れない状況に追い込まれる。多胎児、特に低出生体重児には十分な体力がなく、授乳が長時間にわたり、授乳回数も頻繁になる。また、授乳はメンタルに与える影響が大きく、母乳にこだわらない柔軟な考え方をしないと母親を追い詰めることになる。これは離乳食にも該当し、食の細い多胎児にあっては食事が長時間に及ぶ。また、食事は多胎児の場合は手も時間もかかるが、この事実を育児者の多くが知らないまま育児に突入し、その結果いらだちが募る。また、高齢出産の場合、ただでさえ体力がない上に、長期の入院・安静により大幅に体力が低下し困難感がさらに高まる。各時期に共通した問題点としては、不十分な情報供与から来る不安感や準備不足、あるいはエビデンスに基づかない不正確で先入観を再生産するような、必要以上に当事者を不安にさせる情報による迷いや不安感が挙げられる。また、多胎の仲間がいないこと、単胎児、あるいは多胎児同士で比較されることも不安感や孤立感を助長する。こうした中、専門職による間違った指導を受けると（単胎への指導を多胎にするようなケース等）、多胎家庭の育児状況は厳しいものとなる。さらに、ひとり親家庭、外国ルーツ家庭、若年家庭、障がい、貧困

等さらなる負担が加わると事態が重篤化しやすい。また、低出生体重児や神経異常等の児童虐待のリスク因子により虐待リスクが高くなると言われている。里帰り出産の場合、里帰りが長引き、父親の父性の形成が不十分になったり、夫婦関係が悪化することもある。また、長期にわたる育児支援による疲労や育児観の違い等から両親との関係が悪化する場合もある。男性のワークライフバランスの悪さや一方的なジェンダー役割意識から来る不十分な家事・育児協力に加え、高齢や就労のために父母の支援が得られないなど育児支援者の確保が困難な場合も多い。保育所入所の難しさはまだ解消されていない。また、入所できたとしても、場合によっては別々の保育所といった事態もあり得る。こうしたことにより、特に母親の就労環境は大きく阻害され、早期の休職・退職、職場復帰の遅れ・諦めはよくある現実である。多胎児を連れての外出困難は想像を超える。単胎児との比較や多胎の状況に関する無知から来る心無い言葉やよかれと思ってなされた言葉がけさえ、場合によっては多胎育児者を追い詰め、孤立感を高める。乳幼児期を過ぎても、クラス分け、児の体力差・学力差・成長差、親との相性の差、思春期の自立の問題、進路・職業・結婚等の選択の問題、同時出費による経済的な困難と悩みは尽きない。こうした中で育児に対する十分な満足感が得られない場合、自尊感情の低下や子どもに対する罪悪感が生じやすく、その影響は長く続く。

3. 求められる支援

あらゆる支援策は制度化される必要がある。その際、妊娠期・出産期・育児期を通じた切れ目ない支援が重要となる。一方、妊娠早期からの介入により、困難な時期に対する集中的支援が可能となる。多くの多胎家庭は、乳児期を何とか家族単位で乗り越えているが、今後は地域全体で支援を行うことで更なる自立へと促せよう。特に、ピアサポーターが同席する「プレパパママ教室」やピアサポーター派遣、専門職との同行訪問、外出支援、乳幼児健診・予防接種の同行支援、家事・育児支援等、ニーズに合わせた支援策をさらに普及すべきである（オンライン含む）。次に、支援の全てが多胎に特化する必要はない。既存のセーフティーネットと多胎に特化した支援の混合が重要であり、当事者の状況や地域の特性に基づく支援のベストミックスを当事者自らが選び取れる仕組みや利便性の高い支援が求められる。また、妊娠期からの情報提供や頬の見える支援が必要である。多胎家庭支援には医師・保健師・助産師・看護師・保育士等の専門職、行政職、研究者、育児支援者、家族を含めた当事者等多様なアクターの協働が必要である。特に、病院との連携は喫緊の課題である。各分野・地域におけるグッド・プラクティスを共有し、家事支援等の実務的な支援だけではなく、ピアサポート、当事者同行訪問等を通じた心の寄り添いを意識した取り組みやオンライン活用が有効であろう。また、医師、看護師、保健師、助産師、保育士等の専門職教育における多胎に関する知見の教授と当事者ファーストの視点に立ったスキルアップが望まれる。

論文・書籍・研究紹介

一般社団法人日本多胎支援協会『ふたご・みつごの安心！ 妊娠・出産・子育てブック』翔泳社、2024年。

本学会員を多く含む日本多胎支援協会の理事20名の筆による『ふたご・みつごの安心！妊娠・出産・子育てブック』が2024年11月に上梓された。

同書は、多胎の妊娠・出産・育児に関して、総合的な視点から、多胎に関する基礎知識や多胎家庭が使える社会資源、育児のノウハウなどをまとめたものである。その際、総合的な視点とは、第一に、妊娠期から思春期を含めた育児期までの切れ目のない連続性、第二に、当事者、専門職、研究者、育児支援者等の幅広い執筆陣がそれぞれの立場、専門性、経験に裏打ちされた知見によるものである。その上で、なるべく最新かつエビデンス・ベースの情報・知見をわかりやすい表現で提供するというコンセプトのもと編集されている。ネットやSNSにはエビデンスに基づかない不正確な情報が溢れ、当事者たちを困惑させたり、不必要的不安感を与えたりしているからである。また、「スマホネイティブ世代」をも意識しつつ、図版やイラストを多く取り入れ、テキストもなるべく最小限にとどめるなどの工夫を施している。

同書は7章仕立てで、第1章「ふたご妊娠の基礎知識」、第2章「ふたごの出産」、第3章「1歳までの生活と注意点」、第4章「3歳までの生活と注意点」、第5章「ふたごたちとの暮らしと悩み」、第6章「制度やサービス・暮らしの支え」、第7章「子どもたちからママ・パパへ」という構成であり、それに「はじめに」の導入が付いている。その「はじめに」では、「ふたごちゃん、みつごちゃんの妊娠おめでとうございます！うれしい反面、不安もいっぱい。わからないことだらけ。『ふたご』と聞いて頭が真っ白。はじめての妊娠でふたごなので、育てられるのか不安、上の子がいて、下に『ふたご』と聞いていっどんに増える子どもの数に戸惑う。どれも当たり前です。みなさんの先輩ママも同じ気持ちになりました。あなただけではありません。この本は、そんなあなたの不安に寄り添うものでありたいと思ってつくりました。中略。これから始まるあなたのふたご・みつごライフが、自分とふたごちゃんみつごちゃんを、そして家族や周りの人を大切に思え、幸せを実感できる毎日であることを願っています。」とあくまでの当事者に寄り添うものであることを強調している。

同書においては、単胎と異なる多胎妊娠の特徴や妊娠期の過ごし方、あるいは単胎児とは違った多胎児の成長過程を示し、そこでのリスクや注意点を示しつつ、同時に安心感を提供している。また、たとえば、「1歳まで」と「3歳まで」の二期に分けて、育児者の負担を軽減する具体的な育児のコツやスキルを紹介しつつ、生活に潜んでいるリスクに注意を促したり、育児者のメンタルケアについても扱っている（マタニティブルーや産後うつについては第2章「ふたごの出産」で解説している）。さらに、各章にコラムや体験談をちりばめたり、ふたご・みつご本人たちからの声を掲載したりすることで、多胎の父母の自己効力感や自己肯定感がより高まるよう配慮されている。

多胎の妊娠・出産・育児に関しては、これまで各種専門書・育児書のほか、育児雑誌の拡大版的なものや、さまざまな団体が作成したパンフレットやノウハウ集などが出されてきたが、同書は本格的でありながらも、手ごろでわかりやすいハンドブックになっている。当事者だけではなく、支援者や専門職・研究者にもぜひ手に取ってもらいたい。



論文・書籍・研究紹介

安藤寿康（慶應義塾大学・名誉教授）

2023年から24年にかけて、『ふたご研究シリーズ第2巻 パーソナリティ』（監修・著、創元社）、『能力はどのように遺伝するのかー「生まれつき」と「努力」のあいだ』（講談社ブルーバックス）、『教育は遺伝に勝てるか』（朝日新書）、『運は遺伝するー行動遺伝学が教える成功法則』（橋玲氏との対談、NHK新書）、『眠れなくなるほど面白い遺伝の話』（監修、日本文芸社）と5冊を出版させていただいた。このうち『能力はどのように遺伝するのか』と『教育は遺伝に勝てるか』の二冊は、現時点で私の力量で書くことのできる行動遺伝学の最先端の紹介とその教育への示唆について異なるスタイルで書き著した二卵性双生児のような著作である。特に新書という形で3冊立て続けに世に出したおかげだろう、「行動遺伝学」の世間的認知度が格段に上がったように思う。Xで「行動遺伝学」のキーワードをチェックすると毎日のように新しい投稿がみられる。もっともこれまでの認知度が限りなくゼロに近かったから、上がったといっても、ごく一部の人たちだろう。



その「ごく一部の人たち」、すなわち「行動遺伝学」がアンテナに引っ掛かって、Xなりアマゾンのカスタマーレビューなどになにかを語りたいと思った人たちの投稿がやはり気になる。著者から見て、いまのところ、それは大きく二つに分かれる。一つは正しく主旨を理解し、そのメッセージを自分の思索に落とし込んで論考してくれているもの。なかには著者の私もインスピアされるような考察もある。これはありがたい。対談をさせてもらった橋玲氏はその筆頭と言えるし、教育ジャーナリストのおおたとしまさ氏やイラストレータの上大岡トメさんなども、その著作に拙著を引用や参考してくれている。

もう一つは、表面的で世俗的な理解（eg. やっぱり知能は遺伝だから努力しても仕方がない）を、ある場合には諦観をこめて、またある場合には他者を中傷するための根拠として書き捨てるもの。後者については、当然予想されていたので、どの本にもそのはしがきやあとがきに注意書きを書いておいたが、それすら読み取れていない、あるいは本書を読まずネット上の情報からそのメッセージを歪曲して投稿している（eg. 行動遺伝学という努力しないことを正当化する学問が最近流行しているようだ）と思われ



る。こうした誤解を解消することも意図して、今年『疲れなくなるほど面白い』といういさか軽薄な、しかしそれ多くの人に手に取ってもらえそうなライトなシリーズからの依頼を受けて、「遺伝」の監修を引き受けてしまった。

実は予想していた第三の部類の投稿がいまのところほとんど見られないのを、薄気味悪く思っている。それは行動遺伝学に対する徹底的な批判コメントだ。能力が遺伝的であるという主張を、優生学・優生思想と結びつけて「悪の学問」よばわりする、社会科学や哲学・思想界でいまだに根強く残る批判や、行動遺伝学と双生児法の理論や方法を根本から批判するといったような、想定されるまともな学術的批判投稿がない。だいたい科学者は、自分が使っている理論や方法の欠点や限界など百も承知で、それでも現時点での妥当性をとりあえず主張できるやり方で研究を進めているに過ぎないから、せめてこちらが想定している範囲の批判くらいは出てきてもよさそうなものだが、それすらないのはどうしたことだろう。これから湧いてくることを期待している(ちなみに「なんだかよくわかんないや」とつぶやかれる第四の部類は、これも気になるが、当面無視する)。

もちろん双生児法の方法論的前提が怪しいという、行動遺伝学自体がすでにそれについて数多くの検証をしつくしている、昔からよくある「本質的欠点」(eg. MZ と DZ の等環境仮説とか子宮内環境の差異の無視など)への批判や、そもそも遺伝と環境という二項対立的枠組みで考えること自体が虚構、生命は要素還元できない全体性のダイナミズムで理解されるべきであり、「すべては無」「すべては全体」「すべては動的発生プロセス」という「色即是空、空即是色」の般若心経的世界観(実は私はこの原稿を四国遍路を結願した後の高野山の宿坊でしたためている。八十八か寺、計 176 回唱えたこのありがたい宗教的世界観は、しかし世俗的な科学的世界観とは別次元である)のような、いずれももはや相手にするには及ばない批判言説はいまでも目にする。これはいつまでもなくならないだろう。

こうした双生児研究と行動遺伝学の著作を世に出す過程でやはり気になるのは、この学問が正統なアカデミズムの中で正当に認知され、隣接する諸学問領域の中で正当に位置づけられていないということだ。その証拠に、あれだけたくさんの科目を設置している放送大学にも「行動遺伝学」が取り上げられる気配はない。誰かのネット投稿に「行動遺伝学って未承認の民間療法みたいなものでしょ」というのがあり、思わず「うまいっ!」と膝を叩いてしまった。こうした状況を改善したくて、慶應義塾ふたご行動発達研究センターで長年行ってきた学術研究をきちんと世に出そうと創元社で「ふたご研究シリーズ」を企画した。そして昨年、とりあえず予定していた全 3 卷を出版し終えた。これは日本の出版界に学術研究としての双生児研究の足跡をとどめておきたいと意図して刊行したものであり、つづけて日本双生児研究学会で活躍する諸先生方にも続巻をお願いしようと考え、そのお話も、このニュースレターをお読みの理事には随分前からさせていただいている。あの話はどうなったのだと思われていることだろう。この場を借りて現状を明かすと、出版社として、この企画の意義は十分認識しているものの、いかんせん思ったほど売れないのでそうだ。もし続巻を出すとしても、著者への印税は払えない、それでもよいなら、と言われている。それで言い出しづらかったのである。ここであらためて、そのような条件でもよいとおっしゃっていただけるなら、出版企画を改めて立ち上げますが、どうしましょう??(学会で対面の懇親会の場が設けられる時が来たら、改めて個別にご相談させてください)。

< 日本双生児研究学会理事会等報告 >

日本双生児研究学会 2024 年第 1 回理事会 議事録

日 時：2024 年 1 月 27 日（土）12:20-13:20

場 所：京都大学 楽友会館 会議室

出席者：安藤寿康、落合世津子、志村恵、鈴木国威、高橋雄介、松葉敬文、横山美江、渡邊幹夫
計 8 名（敬称略）

欠席者：加藤則子、酒井規夫、菅原ますみ、早川和生 計 4 名（敬称略）

報告事項

1. 第 38 回学術講演会の開催状況について

高橋大会長より、午前中の開催状況について報告された。

2. 会員状況報告（渡邊理事）

2023 年 12 月末現在の会員数について、現会員数 118 名（うち新規入会者 8 名、名誉会員 8 名）、
長期未納者 2 名、退会者 4 名、死亡退会者 1 名であると報告された。

3. メーリングリスト（ML）について（渡邊理事）

登録は会員全員であることが報告された。

4. 2023 年の会計収支報告及び監査報告（別紙資料参照）（渡邊理事）

渡邊理事より会計収支報告がされ、別紙のとおり、承認された。

監査は、乾監事・畠山監事より 2024 年 1 月 22 日に受けたことについて、報告された。

5. 学会誌編集委員会報告（別紙資料参照）（安藤委員長）

安藤委員長より、投稿状況について 2023 年（Vol.2）への掲載準備中のものが 2 本であることが報告された。

審議事項

1. 2024 年の事業計画案について

1) 2024 年学会の目標について（横山理事長）

- ① 日本双生児研究学会を日本学術会議に登録されるよう申請に向けた準備をする。
- ② 学会誌への論文投稿を促進し、J-stage、医学中央雑誌への登録を目指す。

2) 学会誌編集委員会活動計画（安藤委員長）

安藤委員長より、現在査読中のものが 1 件あるとの報告があった。

また、掲載料とは別に投稿料（12,000 円）を徴収（ただし、著者全員が会員の場合は免除）することについて審議され承認された。

現行の査読期限（半年以内）について、短縮する方向で委員会で検討することとなった。

3) ニュースレターの発行について（高橋理事、落合理事）

高橋理事より、12 月末に発行されたことが報告された。

4) 研究会の開催について（松葉理事）

松葉理事より、講師について幅広い研究分野の人選について提案がなされた。

非会員については、参加費を徴収する方針となった。

5) 奨励賞審査委員会について（志村委員長）

志村理事より、4 月ごろに募集を行うことが報告された。

2. 学会費の改定について（横山理事長）

前回理事会で承認された学生および多胎児の保護者は現行のまま 3000 円、その他の方は 5000 円について横山理事長より、総会において会費の改定を提案することが報告され、承認された。

3. 2024 年度の予算案について（渡邊理事）

渡邊理事より、予算案について説明があった。

ニュースレター編集費について、年 1 回の発行になったため 20,000 円とすることとなった。

また、予備費として 10,000 円を計上することとなった。

4. 第 39 回（2025 年）学術集会について（渡邊理事）

渡邊理事より、大阪大学（吹田キャンパス）で開催することが報告された。

（日程は 1 月末から 2 月初めで会場調整中）

5. 第40回(2026年)学術集会の候補について

慶應義塾大学 教授 藤澤啓子氏を大会長とし、慶應義塾大学で開催することが報告された。

6. 日本学術会議への登録申請について

横山理事長より団体登録の要件について確認された。2025年度の申請を予定することとした。

7. 2024年奨励賞授賞式について

該当者なし

日本双生児研究学会 令和6年(2024.1.1~2024.12.31)会計予算案

収入		支出	
前年繰越	1,037,623	ニュースレター印刷費(75号)	20,000
会費収入		ニュースレター郵送費(75号)	20,000
78人(120*0.65) *¥5,000	390,000	ニュースレター編集費	30,000
過年度会費10人*¥3,000	30,000	学会誌編集費	50,000
利子	10	研究会講演者謝金	30,000
		研究会講演者交通費	30,000
		研究会会場使用費	5,000
		学術講演会援助費	100,000
		会議費(幹事会)	20,000
		奨励賞関連費	0
		ホームページ関連費	35,000
		郵送代(年会費振込用紙発送)	10,000
		事務局人件費(5,000/月)	60,000
		消耗品費	5,000
		次年繰越金	1,042,633
収入合計	1,457,633	支出合計	1,457,633

日本双生児研究学会 2024年総会 議事録

日 時：2024年1月27日(土) 13:25-13:55

場 所：京都大学 楽友会館 講義室

上記第1回理事会の内容を報告、審議し承認された。また、渡邊理事より、2023年度会計収支報告、乾監事より監査報告を受け、承認された。

日本双生児研究学会 令和5年(2023.1.1~2023.12.31)会計報告

収入		支出	
前年繰越	1,242,871	ニュースレター印刷費(74号)	14,487
会費収入		ニュースレター郵送費(74号)	16,870
令和2年度年会費(1)	3,000	ニュースレター編集費	30,330
令和3年度年会費(1)	3,000	学会誌編集費	37,015
令和4年度年会費(4)	12,000	研究会講演者謝金	30,165
令和5年度年会費(69)	207,000	学術講演会援助費	100,165
利子	10	会議費(幹事会)	13,800
		奨励賞関連費	102,266
		ホームページ関連費	16,553
		事務局人件費(5,000/月)	60,000
		電報代(慶弔)	3,265
		消耗品費	5,342
		次年繰越金	1,037,623
収入合計	1,467,881	支出合計	1,467,881

以上 相違ありません。

令和2024年 / 月 日

監査 久山典子

監査 有川留乃男

日本双生児研究学会 2024 年第 2 回理事会（メール審議） 議事録

日 時：2024 年 2 月 28 日（水）から 3 月 6 日（水）にかけて
場 所：メール審議

審議事項

1. 夏の研究会開催について

夏の研究会を以下の通り開催することが承認された。

形式：オンライン開催

演者：蔵研也 先生（自由主義研究所 主任研究員）

演題：「双子研究の意味するアポリアと社会科学」

日程：2024 年 7 月 27 日（土）13:30～15:00

日本双生児研究学会 2024 年第 3 回理事会 議事録

日 時：2024 年 7 月 27 日（土）研究会終了後 午後 3 時～3 時 40 分

場 所：zoom

参加者：加藤則子、酒井規夫、菅原ますみ、鈴木国威、高橋雄介、松葉敬文、横山美江、
渡邊幹夫（敬称略）

欠席者：安藤寿康、落合世津子、志村恵、早川和生

報告事項

1. 夏の研究会について（松葉理事）

・研究会の参加者は 11 名であったこと、講師の蔵研也先生には原稿を依頼されたことが報告された。

2. 第 39 回学術講演会の準備状況について（渡邊理事）

・第 39 回学術講演会は、2025 年 2 月 1 日に大阪大学で開催されることが報告された。

3. 学会誌編集委員会活動計画（松葉副委員長）

・現時点で、掲載予定の論文が 1 本、査読中の論文が 3 本であり、査読期間がおよそ 2 ヶ月以内であることが報告された。投稿料、掲載料については、早急に委員会で検討することが報告された。
・2023 年の夏の研究会の講師、2024 年学術集会の教育講演の講師の先生方からの寄稿について引き続きリマインダーをかけていく予定。

4. 奨励賞審査委員会について（高橋理事）

・理事会終了後、奨励賞の募集について会員に周知し、9 月末を募集期限とすることが報告された。

5. ニュースレターの発行について（高橋理事）

・ニュースレターについては、第 39 回学術講演会のプログラム等を掲載する予定であることが報告された。

6. 日本学術会議への登録申請について

・本学会誌の発行状況から、2025 年に日本学術会議への登録申請をすることが確認された。

7. 第 40 回学術講演会の開催準備状況について（藤澤啓子教授）

・第 40 回学術講演会は、慶應義塾大学の藤澤啓子教授が大会長として 2026 年に開催いただく予定であることが報告された。

8. 会員状況について（渡邊理事）

・渡邊理事より、会員状況について報告された。

9. その他（メディア対応等）

・メディア対応については、必要時事務局からご連絡いただくこととした。

日本双生児研究学会 2024 年第 4 回理事会 議事録

日 時：2024 年 10 月 21 日（月）午後 4 時～

場 所：zoom

出席者：安藤寿康、落合世津子、加藤則子、志村恵、菅原ますみ、松葉敬文、横山美江（敬称略）

欠席者：酒井規夫、鈴木国威、高橋雄介、早川和生、渡邊幹夫（敬称略）

1) 学会誌編集委員会（安藤委員長）

- ・藤村氏の論文が新たに掲載され、志村氏の論文が掲載準備中であり、他 3 本の論文が査読中であることが報告された。
- ・ISSN 取得について検討され、松葉副編集委員長が取得の手続きをすることとなった。

2) ニュースレターの発行について（高橋理事、落合理事）

- ・例年通り、ニュースレターを発行することが報告された。

3) 研究会の開催について（松葉理事）

- ・ソウル国立大学 Joohon Sung 教授に次回の夏の研究会の講師を依頼することが提案され、承認された。

4) 奨励賞審査委員会について（志村委員長）

- ・奨励賞審査委員会で検討の結果、今回の奨励賞の対象者はなしとの報告がなされ、承認された。
- ・奨励賞審査委員会の審査結果は、奨励賞審査委員会名で事務局より通知することとなった。
- ・奨励賞審査規定には、「対象となる業績は、原則として、査読付きの国際誌（本会発行の "Japanese Journal of Twin Studies" を含む）、ないしはそれに準じた学術雑誌に掲載された、被推薦者が単著者ないしは第一著者の学術論文とする。」と改正することを奨励賞審査委員会から提案され、承認された。

5) 第 39 回（2025 年）学術集会について（渡邊理事）

- ・第 39 回（2025 年）学術集会について資料に基づき報告された。

6) 第 40 回（2026 年）学術集会について（藤澤啓子先生）

- ・第 40 回（2026 年）学術集会について、慶應義塾大学で開催され、準備を進めていることが報告された。

< 学会事務局よりお知らせ >

2025年の会費については、同封の振り込み用紙で納付をよろしくお願ひ申し上げます。本会の会計年度は1月～12月になります。会費の金額は、多胎児の保護者等の多胎当事者と学生は3,000円、その他（大学や研究組織に所属する研究者・教育者など）5,000円となっております。どちらにもあてはまる場合は学会の趣旨に鑑み、5,000円の納付をよろしくお願ひ申し上げます。振込用紙には過去の実績に基づいた、未納分も含む金額を記載しています。

< 日本双生児研究学会第40回学術講演会のお知らせ >

第40回学術講演会は2026年1-2月頃に慶應義塾大学三田キャンパスで開催する予定です。詳細が決まりましたら学会ホームページ、またはメーリングリストでご案内します。多数のご参加をお待ち申し上げております。（大会長 藤澤啓子（慶應義塾大学））

< 会員用メーリングリストについて >

当学会事業のお知らせと、会員間の情報交換や交流にもご活用いただきたく、2017年度より会員用新メーリングリスト（jstsml@googlegroups.com 以下 ML）にご登録いただいております。ご協力をありがとうございました。登録がお済みでない方は、下記の手順に従いご登録くださいますようお願いいたします。

◎ 現会員の登録について

学会HPの【お問い合わせフォーム】（<https://jsts.jp.net/contact/>）から、「区分」は「その他」を選び、「お問い合わせ内容」に「ML 登録希望」として、①お名前、②メールアドレス、③所属等の3点をお知らせください。追って担当者より「ML 登録完了」のご連絡をいたします。

◎ 新入会員の登録について

新入会員については、「ML 非登録」のお申し出がない限り入会申込と共にMLに登録しますので、連絡は不要です。ご入会後に担当者より「ML 登録完了」のご連絡をいたします。

◎ 配信の停止・変更

配信の一時停止・再開やメールアドレスの変更などについても、上記【お問い合わせフォーム】からお知らせください。

◎ 利用上の注意

- MLでの発信・返信は、「送信者名」、「アドレス」、「本文」がML登録会員全体で共有されます。特に返信の場合はご注意ください。
- 添付ファイルを制限していませんので、コンピュータウィルスは各自で防衛してください。
- jstsml@googlegroups.comからのメールを受信できるように設定していただければ、携帯アドレスでの登録も可能ですが、添付ファイルの容量制限等もありますので、PCアドレスでの登録をお勧めします。
- 大学や職場のドメインを含むアドレスの場合、ウェブ投稿機能がドメイン管理者により無効にされていることがあります。ご自身の投稿が反映されない場合には、ドメイン管理者にご確認の上、別アドレスへの変更等をご検討ください。

編集後記

今号では、ふたごにまつわる研究や書籍など最新の知見を会員の皆さんにたくさんお届けできるようなページを多めに設けることができました。前回に引き続き、第39回学術講演会も完全対面方式にて大阪で開催されます。会場で皆様とお会いできることを楽しみにしております。末筆ながら、2025年が会員の皆様にとりまして実り多き年になりますことをお祈り申し上げます。

編集委員：落合世津子（おおさか多胎ネット・日本多胎支援協会・大阪大学大学院医学系研究科ツインリサーチセンター）・高橋雄介（京都大学）